

PB-226

救護班研修 SPDT(Small Packaged Disaster Training)

八戸赤十字病院 看護部¹⁾、日本赤十字社青森県支部²⁾

○渡辺 孝子¹⁾、浅利 淳子¹⁾、谷川 裕子¹⁾、山野内 博見¹⁾、佐藤 千雪¹⁾、馬渡 恒¹⁾、河合 育美¹⁾、吉川 靖之²⁾

阪神大震災以後、発災直後の防ぎえた死を減らすために超急性期に活動する日本DMATが養成された。赤十字も超急性期にいち早く被災地に向けて出勤し、救護活動を実施することができる救護班要員を育成するために全国赤十字救護班研修会(旧日赤DMAT研修)を実施することになった。青森県支部でも、赤十字が超急性期から慢性期までの災害救護活動を行うために、DMAT活動やこれまでの赤十字救護活動を理解し、実践できるようにするための教育を救護班に行う必要があると考えた。平成22年度より、3カ年計画で新救護班研修「SPDT Small Packaged Disaster Training」(以下、SPDTと略す)を企画し、指導者の育成と研修を開始した。

SPDTは、基礎研修、中級研修、上級研修の3段階構成とした。基礎研修は、対象を常備救護班員または卒後3年目救護員としての赤十字看護師研修修了者とし、職種にとらわれず、赤十字救護班員として備えておくべき基本的な知識と技術を習得する。中級研修は、基礎研修修了者を対象に災害時に特有の傷病と処置およびJPTEC的観察など、上級研修は、中級研修修了者ならびに全国赤十字救護班研修修了者を対象とし、応用的内容とした。上級研修修了後、SPDTトレーナー認定試験(筆記)を実施し、合格者に認定証を授与する。研修を開始した翌年(平成23年)には、東日本大震災が発生し、そこでの救護活動をもとに研修を評価し、内容を修正した。平成25年度をもって級研修まで終了したので、SPDTについて報告する。

PB-228

長野赤十字病院が独自に行った救護班技能訓練の評価報告

長野赤十字病院 救急外来

○小出 由紀、大沢 君枝、中澤 多鶴子、野村 純子、古澤 武彦、柳谷 信之、上松 淳一

東日本大震災以降に救護班要員から、「実践に即した知識・技術を勉強したい」という要望があった。当院では、平成24年度から、救護班要員に対し独自に研修を行っている。災害対策委員や院内のDMAT隊員が中心となり「救護班技能訓練」を企画・実施している。今回、参加した救護班要員に評価のためのアンケートを実施したので報告する。

【目的】 当院の「救護班技能訓練」の評価。

【対象】 救護班技能訓練に参加した救護班要員28名。

【期間】 平成25年6月9日救護班技能訓練直後。

【方法】 救護班技能訓練後、アンケートを行った。アンケートは、技能訓練内容についての満足度を聞いた。

【結果】 救護班技能訓練の内容は、(1)災害時のトリアージ法(2)トランシーバー・衛星携帯電話の取り扱い(3)救護所運営シミュレーションの3項目である。講師及び指導者は、DMAT隊員と災害対策委員である。研修スケジュールは休日の4時間とした。救護班要員35名のうち28名が参加した。満足度は、「とても良かった、良かった」と答えたものは、救護所運営シミュレーション以外は80%以上であった。その中で「事務職としては用語の理解に困った」「実技の時間がもう少しあった方が良いと思う。せかせかした感じがした」などの意見があった。

【考察】 病院独自の救護班技能訓練は、救護班要員にとって満足度の得られる結果となった。今回のアンケートでは今後の技能訓練に向けて有用な意見が得られた。当院は多くの職員が災害医療について学べるように毎年救護班の構成員を変更している。そのため今後も継続した救護班技能訓練を行っていく必要がある。

PB-227

多職種参加の災害救護訓練 ～目的をしぼってじっくり学ぶ～

福島赤十字病院 災害対策委員会

○野地 啓子、渡部 洋一、渡邊 知子、野田 誠

【はじめに】 東日本大震災発生後、当院では災害発生時にスムーズに的確に行動できるようにアクションカードを作成し、平成24年3月にはアクションカードを活用した災害救護訓練を行った。昨年度はトリアージにポイントを絞った研修を実施し、各部門からの意見をふまえて災害対策マニュアルを修正した。平成26年3月に、マニュアル内容の検証及びアクションカードを活用した初動対応と傷病者受け入れ時のトリアージを目的とした災害救護訓練を行ったので報告する。

【訓練方法】 事前研修として目的と各自の役割及び災害対応のポイントの説明。訓練は「第1部-1:災害対策本部設置訓練、2:各部署アクションカード運用訓練」「第2部:医療救護訓練(患者受け入れ・トリアージ訓練)」の2部制とした。第2部では、各エリアにDMAT隊員をインストラクターとして配置、模擬患者は10名と少なくして「時間をかけて的確にトリアージの技術を学ぶ」ことを目標とした。

【結果・考察】 多くの傷病者が病院に殺到することを想定した「多数傷病者受け入れ訓練」は、災害救護に携わることの少ない職員にとっては、「訳が分からないうちに終わってしまった」という感想があった。今回の訓練は、事前研修を行ったこと、2部制としたこと、傷病者数を少なくして時間をかけたトリアージを学ぶことができた等、参加者から好評であった。また、訓練後に災害対策委員会を開催し、トリアージタグやライティングシートの記録内容の検証も行った。今後も効果的な災害救護研修・訓練を企画し、災害拠点病院として機能するための体制の確立と職員の防災意識の向上を目指していきたい。

PB-229

日本赤十字社第一ブロック支部合同災害救護訓練の実施における現状と課題

日本赤十字北海道看護大学 看護学部¹⁾、

日本赤十字社北海道支部 事業推進課²⁾、釧路赤十字病院³⁾

○尾山 とし子¹⁾、竹中 正彦²⁾、二瓶 和喜³⁾

【目的】 平成25年度日本赤十字社第一ブロック(北海道・東北)支部合同災害救護訓練(以下、訓練)は、平成24年度の東日本大震災における検証会(宮城県支部)で明らかになった課題を反映させた内容であった。そこで、今回実施された訓練の評価を行い、問題点や課題を明らかにし、今後の訓練や救護活動に活かす。

【内容】 訓練は、「被爆講座」「図上訓練」「災害死者家族支援活動(DMORT)」「実動訓練とその検証」の構成で、釧路赤十字病院を会場とした。【方法】 訓練に参加した救護班17個班(道内9、東北8)、107名にアンケート調査を実施。

【結果】 107名全員(100%)から回答を得た。50名(47.0%)が訓練初参加であり、61名(57.0%)は、救護活動未経験者であった。訓練の満足度は、103名(96.0%)が、良かった～やや良かったと回答した。「最も興味深く、有意義だった」のは「実働訓練」で、71名(66.0%)。内容の理解では「赤十字救護活動の指揮命令系統」で87名(81.0%)が、よく理解できた～概ね理解できたという回答だった。「被爆講座」では、これまで全く知識が無く、大変有意義だったという意見があった。「DMORT活動」では、実践は難しいが個人が心構えを持ち、チームで対応する事が重要、日常の臨床場面でも応用可能との感想があった。

【考察】 東日本大震災大震災での救護活動の検証会を受けて構成した訓練内容は、概ね目的を達成できた。今後の訓練では、他の防災関係機関やDMAT等との連携した訓練が必要である。また、救護班には様々な役割が求められるため、災害種類別、サイクル別、活動別の訓練内容を考えることも必要である。